

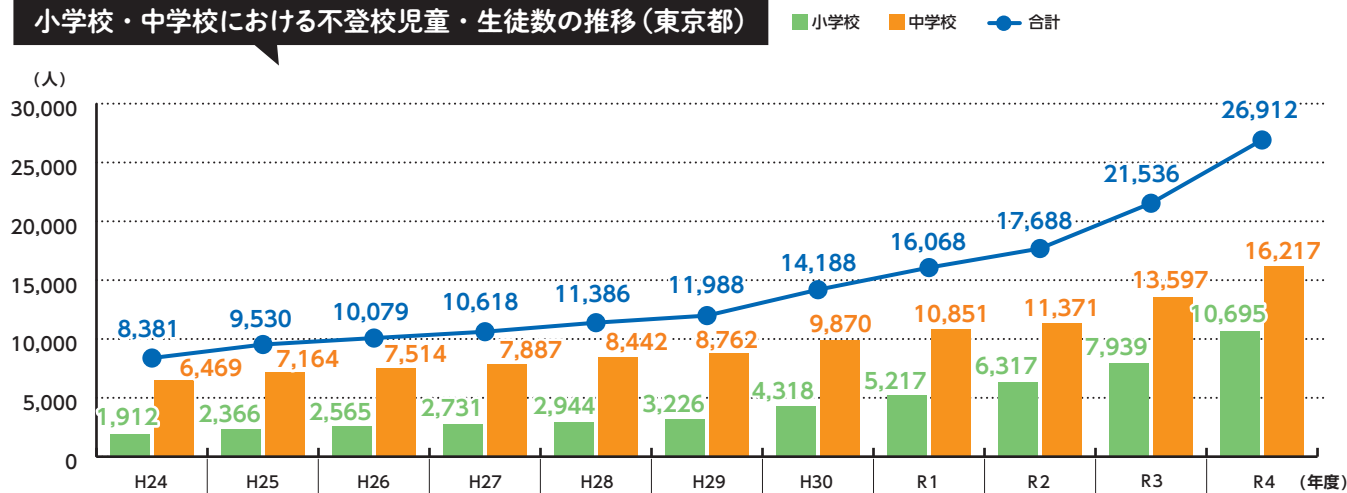
地域で支える子供たちの未来

— 不登校の現状と体験活動の意義 —

文部科学省が行った「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると「令和4年度の国立、公立、私立の小・中学校の不登校児童生徒数が約29万9千人（過去最多）、うち学校内外で相談を受けていない児童生徒数が約11万4千人（過去最多）、うち90日以上欠席している児童生徒数が約5万9千人（過去最多）」等の結果が明らかになりました。

東京都でも小・中学校の不登校児童生徒数は約2万7千人となり、10年連続増加する中で、不登校対応は急務となっています。

小学校・中学校における不登校児童・生徒数の推移（東京都）



「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」から作成

2022（令和4）年、14年ぶりに文部科学省の「生徒指導提要」が改訂され、不登校の子供たちへの支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、子供たちが自らの進路を主体的にとらえ、社会的に自立する方向を目指すように働きかけることが強調されるようになりました。

そして、今、子供たちの社会的自立を目指す上で、体験の大切さが注目されています。

生きる力の基盤、子供の成長の糧としての体験活動

文部科学省ホームページ

「体験活動の教育的意義」より

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm



- 1 現実の世界や生活などへの興味・関心、意欲の向上
- 2 問題発見や問題解決能力の育成
- 3 思考や理解の基盤づくり
- 4 教科等の「知」の総合化と実践化
- 5 自己との出会いと成就感や自尊感情の獲得
- 6 社会性や共に生きる力の育成
- 7 豊かな人間性や価値観の形成
- 8 基礎的な体力や心身の健康の保持増進

不登校の子供たちは、学校で実施される活動や行事への参加が難しく、かつ学校以外での体験活動の機会を確保することは、子供たち、家庭にとっても少なくない負担が予想されるところです。

このような現状を踏まえ、東京都教育委員会では、不登校の子供たちの社会的自立の一助とすることを目的に、学校外での体験活動の場を提供する「未来きらめきプロジェクト」を実施しています。

学生時代、NPO法人ブレンヒューマニティーで不登校の子供の学びの支援や体験活動に携わり、公文教育研究会を経て、東日本大震災を契機に2011年チャンス・フォー・チルドレンを設立。



夢中になる体験が 自分の未来を 支える

今井氏が代表理事を務める公益社団法人「チャンス・フォー・チルドレン (以下CFC)」は、経済的に困難を抱える子供たちに学習や文化・スポーツ、体験活動等で利用できる「スタディクーポン」※を提供するほか、様々な理由で体験の機会を失っている子供たちと地域活動を通してつながる活動を行っています。

※スタディクーポンについて

現金給付ではなく、用途を教育プログラムに限定し、学習塾や習い事、体験活動等で利用できる電子クーポン。地域の4,500以上の教室や団体がクーポンの利用先として参画しており、子供からのリクエストに応じて随時教室等を追加している。

今井さんが今の活動に携わるようになったきっかけを教えてくださいませんか？

今井氏 小学生の時、阪神淡路大震災を経験し、神戸で育ちました。大学生の頃、震災をルーツに子供の体験活動を行う学生NPOと出会い、活動に参画しました。東日本大震災をきっかけに、子供たちの学びや体験の機会を支えるために、学生時代の仲間とCFCを立ち上げました。

CFCで子供たちに提供している「スタディクーポン」はどのように活用されていますか？

今井氏 「放課後の多様な学びや体験の機会を届けたい」という思いで、クーポンは学習だけでなく、スポーツや音楽芸術、キャンプなど幅広く利用できる制度にしていたのですが、9割は学習塾に利用されていました。受験期を迎えた中高生を見ると、幼少期の体験活動の有無が学習等への意欲に影響していると実感する場面もありました。実際、「本当はピアノをやってみたかった」とか、幼少期にやってみたいことを諦めた経験をした子も多くいました。体験活動の機会を通じて、子供たちは学びの原動力を得ていくものです。だからこそ、多様な体験を通じて、自分のやりたいことを見つける機会を作っていくことが大切です。

自分の想像の中だけでは何が好きなかはわかりません。経験が夢中になれるものを見つけるきっかけになります。そして、夢中になれることが、将来の自分を支えてくれるのです。

新型コロナウイルス感染症の拡大とその対策のためにオンラインの環境が整えられて、学習の機会は学校外にも広がりました。学習の環境にも大きな変化がありましたが、体験活動に関しては、コロナ禍の前と後で違いはあったでしょうか。

今井氏 オンライン環境の整備によって、学習の選択肢が増えたことは喜ばしいことです。一方で、体験活動の機会は、オンラインという手法だけで埋めることは難しいと感じています。また、コロナ禍や物価高騰の影響で、経済的に苦しい家庭が増え、経済格差が広がっています。体験格差はコロナ禍以前から存在していましたが、経済格差の拡大によって体験格差がより深刻になっています。積極的に体験活動を経験させてあげたいのに、経済的な問題などでできない家庭から、親御さん自身に経験が少なかったり乏しかったりして体験活動の想像がつかないケースもあります。

環境の違いで体験活動の機会を失っている子供も多いということですね。こういった子供たちを体験活動の機会を提供する支援等につなげるためにはどのようなことが必要でしょうか？

今井氏 ポイントは人とのつながりではないでしょうか。子供たちが最初に情報を得るのは、学校や教育センターで配布されるチラシなどでの告知です。そういう(子供に関連する)施設に情報を置いておくことは大前提として、学校に行けなかったり、外に行けなかったりなど特に困難な状況にある子供は、あとひと押しがないと活動になかなか参加できません。このひと押しをしてくれる存在にちゃんとアプローチをしていくことが必要です。「やってみようよ」と言ってくれる周りの人たちがいるかどうかは、とても大事ですね。親御さんだけでなく、学校の先生方やスクールソーシャルワーカーの方々など、いろいろな人が関われる環境づくりが大切だと思います。

ほかに体験活動の機会をつくったり、周知したりする上で必要なことはどのようなことでしょうか？

今井氏 親御さんが子供に体験活動をさせてあげたいという思いがあれば、経済的負担を少なくしたり、情報を届ける際に手当てを厚くしたりということですが、そうではない方々には、生活の自然な環境の中で、体験の機会を埋め込んでいくことです。それは、社会教育や生涯学習の領域ではないでしょうか。例えば、学校もそうですけども、児童館など子供たちが日常的に参加するところ、そういった場の中で地域の方と連携して、申込み不要とか、来たらたまたまやっていたとか、そういった環境を作っていくことによって偶発的にこういうものに触れて、何かあれば行くということを繰り返すことが大事なのかなと思います。何かやってみたいことが見つかったり、子供たちが自ら発信したりしてきたときにこういった場所でフォローできる体制があれば、子供たちは地域に活動の場が増えて選択の幅が広がり、体験活動の機会をあきらめずに済むと思います。行政のこの領域でいうと生涯学習の分野、あるいは社会教育の分野における行政の役割はとても大きいと思います。

今井さん、ありがとうございました。

現在
募集中!

未来 きらめき プロジェクト

令和5年度から不登校児童・生徒の社会的自立に向けた体験活動プログラムである、「未来きらめきプロジェクト」がスタートしました。この事業はさまざまな理由で学校に行くことができなかったり、友人関係に悩みを抱えていたりする子供たちに、学校外での体験活動を提供するものです。参加者は子供・若者支援の団体等が実施するプログラムを自由に選ぶことができ、子供たちが活動を通じて他者理解を進め、安心感を得るきっかけを作ることを目指しています。今年度も引き続き実施していきます。

未来きらめきプロジェクト プログラム提供団体の紹介

未来きらめきプロジェクトにご協力いただいている団体からのメッセージと参加者の様子を少しお伝えします!



atelier Beyond LLC

昨年度実施プログラム

- じぶんの創造力発見ワークショップ
- おさんぽ研究〈オンライン〉
- タグラグビーをやってみよう
- ショートムービーをつくろう
- アートさんぽ

Message

自分の好奇心とつながることを大切にしているチームです。人はだれでも知らないうちにいろいろな「枠」にはまっているのでは?たとえば決められたルールとか、常識などの考え方も枠のひとつ。そんな存在に気付いて、時にはそこからちょっと出てみる体験をしてもらう場をつくっています。

参加者の様子

「ふだん気がつかないものがたくさんあって、発見したものの写真をショートムービーにするというのはおもしろいと思った」「つくり方のコツがわかったのでこれからも続けてみたい」という声がありました。



NPO法人 アートフル・アクション

昨年度実施プログラム

- ティンカリング

Message

学校や大人が当たり前じゃないよね。いつも何かをしなきゃいけないって思わなくてもいいと思うよ。休んでもいいし止まってもいいって思います。猛烈に走ってもね。お会いできることを楽しみにしています。

参加者の様子

初対面の人たちだけでも大丈夫だった、みんなと協力して楽しかった、といった感想が聞かれました。



特定非営利活動法人 じぶん未来クラブ

昨年度実施プログラム

- Heart Global Music Outreach@立川
- Heart Global Music Outreach@代々木

Message

子供たちから見たこれからの世界はどうでしょうか？私は変化に満ちたワクワクドキドキの世界ではないかと思うのです。子どもたちが自ずと、やってみようと一歩踏み出し、ワクワクドキドキするような体験で溢れる毎日こそが未来をつくるのだと思います。「やってみよう、が未来をつくる」子どもたちがこれからの世界を生き抜くための学びの機会を社会に届け続けていきたいと強く願っています。

参加者の様子

外国の人と友達になることが新鮮で楽しかったという感想が聞かれました。



認定NPO法人 夢職人

昨年度実施プログラム

- ワクワク！ドキドキ！アスレチック
- GO! GO! 自然探検隊
- みんなで作る！子ども村
- ハロウィンキャンプ
- オモシロどうぶつラリー

Message

2004年から首都圏の小学生・中学生を対象に、自然体験・野外活動、スポーツ・レクリエーション、科学・文化・芸術活動、社会体験・キャリア教育などの多彩な体験活動を通年で提供して参りました。みなさまにお会いできるのを楽しみにしております。

参加者の様子

自然の中で、トンボを追いかけたり、草相撲をしたりして「楽しかった」と言ってくれる子が多かったです。思った以上に楽しくて、帰るのがぎりぎりになってしまった子もいたようです。



一般社団法人

ダイアログ・ジャパン・ソサエティ

昨年度実施プログラム

- ダイアログ・イン・ザ・ダーク

Message

何も見えない暗闇の中で、視覚障害があるスタッフとともに様々な体験をしていくプログラムです。真っ暗闇の中、視覚以外の感覚を頼りにスタッフや他の参加者と交流する中で、見た目や固定観念から解放され、他者と交流するときの不安が減った、自分のことが好きになったという声も聞かれます。視覚にとらわれない経験が、誰もが持つ心の壁を少し低くしてくれるのかもしれません。

参加者の様子

はじめは緊張する様子もみられましたが、真っ暗闇では自然に声が出るようになり、不思議と緊張せずに話をして満足そうな笑顔で暗闇から戻ってきました。

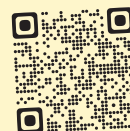
初めて暗闇に入るのはワクワクドキドキの挑戦かもしれませんが、普段から目を使わない達人・視覚障害者のスタッフが案内するので、安心して暗闇で遊ぶことができます。暗闇には楽しむことのできる工夫が満載です。視覚を使わず他の感覚をたくさん使いながら、暗闇の探検をしてみませんか。



参加者の募集をしております

下記 URL または二次元バーコードより公式サイトにアクセスして詳細をご覧ください。

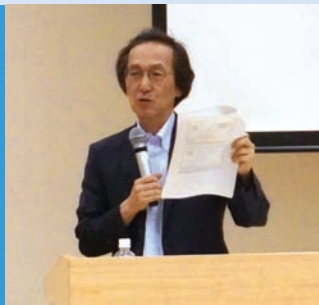
<https://www.syougai.metro.tokyo.lg.jp/sesaku/mirai-kirameki/>



インタビュー Interview

千葉大学名誉教授 保坂 亨氏

千葉大学名誉教授・教育学部グランドフェロー。東京大学教養学部助手（学生相談所専任相談員）、千葉大学教授等を経て現職。「学校を欠席する子どもたち」など著書多数。



不登校の子供たちと体験活動について

保坂氏は長年「不登校」の研究に携わってこれ、「未来きらめきプロジェクト」を企画実施するにあたって助言等をいただく専門委員を務めていただいています。保坂氏が学校を休むということに関心をもつきっかけになった出来事や、専門委員として携わっていただいている不登校児童・生徒に体験活動を提供する「未来きらめきプロジェクト」の意義について、お話をうかがいました。



保坂先生が不登校に関心を持つきっかけになった出来事を教えてください。

保坂氏

「きっかけ」と言えるかどうかわかりませんが、私自身がよく学校を休んだからです。生来虚弱で病気がちで、入院経験がある小学校6年生のときは「長期欠席児童」（当時は年間50日以上欠席）でした。この時は盲腸（虫垂炎）の手術で入院しました。中学入学前の3学期だったので、1か月ほど休んでもあまり影響はなかったのですが、その後、中学校から大学まで本当によく休みました。



入院等をする学校を休むわけですから、「不登校」の状態になってしまいますね。

保坂氏

重い病気や長期での入院となれば、院内学級への転籍がなされ、教師の派遣もあるのですが、1、2か月の入院の子供たちは病院内で授業を受けることが難しいという課題がありました。これまで院内学級のある小中学生に比べ、入院中の高校生教育保障は遅れていたため、一部の自治体では元の学校に籍を置いたまま非常勤の教員を病院に派遣する仕組みを取ってきました。※1 今は「教育相談指導」というかたちで学習支援が受けられるのですが、そういう「ちょっと長めの病氣療養」がきっかけで学校に行けなくなった子供もいるかもしれませんね。

現在は、文部科学省が「小・中学校等において、当該学校に在籍する病院や自宅等で療養中の病氣療養児に対し、受信側に教科等に応じた相当の免許状を有する教師を配置せずに同時双方向型授業配信を行った場合、校長は、指導要録上出席扱いとすること及びその成果を当該教科等の評価に反映することができることとする。」※2としています。



教育現場でもICT化が進んで、病気で学校に行けない子供にとっても、学習はしやすくなったのではないのでしょうか。

保坂氏

確かに、ICTによって学校に行かなくても学習ができる環境はあり、勉強はできますよね。学校に合わないから行かない、という選択をすることもできるようになりました。しかし、学校では勉強をしているだけではないのです。コミュニケーションをとること、身体を使い、何かを集まってやること、なども学校で行う学習です。まさにこれが体験学習で、何らかの理由で学校に行けない子は体験学習の場を失っているといえます。



そういう意味で、「未来きらめきプロジェクト」は、東京都教育委員会が不登校の児童・生徒が本来得られたはずの体験学習の機会を提供することになるわけですね。

保坂氏

「未来きらめきプロジェクト」は若者・子供支援のNPOと連携して、体験活動プログラム（自然体験・野外活動、スポーツレクリエーション、芸術活動など）を提供し、その費用を負担することが画期的といえます。全国的にみても、昨年度に引き続き、継続して予算化されたことは注目に値します。

ちなみに、文部科学省の調査※3では、ボランティア活動を単位認定した高校が100校以上報告されており、小中学校のみならず高校においても学校外での活動の重要性が高まっているように思います。こうした流れも踏まえて、より議論が進むことを期待しています。



昨年度、「未来きらめきプロジェクト」の参加者の中で、野外活動に参加した子供たちにもインタビューをしていただきましたが、その際の子供たちの様子などを教えてください。

保坂氏

野外での活動や知らない子供たちとの共同作業を含む活動は、どんな人でも体力的・精神的負荷が高く、大変なのではと心配していたのですが、子供たちは元気いっぱいでした。段階を踏んで、とか準備をして、と考えていたのですが、体験してしまえば「楽しかった」、という意見が多かったのです。



他に印象的だったことはありますか？

保坂氏

2016年「義務教育段階における普通教育に相当する教育の機会の確保に関する法律」が公布され、これによって「不登校」は問題行動ではないとなりました。インタビューした親子からは、こうした「不登校」に対する認識の変化を感じました。



保坂先生ありがとうございました。

※1 小野善郎・保坂亨『続々・移行支援としての高校教育』福村出版（2023）p.266

※2 「小・中学校等における病氣療養児に対する同時双方向型授業配信を行った場合の指導要録上の出欠の取扱い等について（通知）」（平成30（2018）年9月20日）

※3 「高等学校教育関係制度の活用状況について」（令和5年3月）

区市町村スクールソーシャルワーカーへの支援について

小中学校での不登校の児童・生徒数は、全国で30万人に達しようとしています。高等学校においても不登校は退学につながるものとして課題とされてきました。このような状況の中、不登校など子供と学校を取り巻く課題の原因を探り、課題解決の一助を担うスクールソーシャルワーカー（SSW）の配置が各自治体で進められています。

不登校のみならず、児童・生徒が抱えている様々な問題に対して、保護者や教職員、関係機関等と連携しながら解決に向けた支援を行うSSWの重要性は高まっています。

東京都教育委員会では、区市町村SSWを対象にスクールソーシャルワークの対応力向上を目的とした研修を実施しています。

全体研修

- 不登校の児童・生徒の理解と対応

実務研修

- スクールソーシャルワーカーの職務と役割

課題研修

- 児童虐待 ● 子供の体験格差
- 地域資源の理解と連携
- 外国籍の児童・生徒の支援
- 非行の背景理解

区市町村SSW

研修レポートreport

令和6年6月24日、千葉大学教育学部名誉教授の保坂亨先生を講師にお招きし、今年度第1回目の「令和6年度区市町村スクールソーシャルワーカー（以下SSW）研修」が行われました。講師の保坂先生は日本の不登校研究の第一人者として、長年にわたり御活躍されており、東京都の「不登校児童・生徒の社会的自立に向けた体験プログラム」事業の委員長として御尽力いただいております。

今回の研修のテーマは「不登校児童生徒の対応と理解」として、長期欠席や不登校についての講義をしていただきました。研修には区市町村のSSW、都のユースソーシャルワーカー（以下YSW）合わせて100名以上が参加しました。

講義は、第一部のデータ編と第二部の支援編の二部構成で実施され、第一部のデータ編では不登校に係る各種調査結果等に関するグラフの読み取り方について御教示いただき、数字だけでなく実態を見ることの重要性を再確認しました。

第二部の支援編では、学校現場で確認できる不登校の兆候や、不登校のタイプ、学校教育と児童福祉の連携についてといった具体的なポイントについてお話いただきました。

特に歯科健診では口腔内の状況を見ることで医療ネ



不登校の児童・生徒の
理解と対応



6/24(月)
13:30-16:30

グレート発見に繋がるといった視点に参加者からの反響も大きく、支援の場で早速活かせる情報が盛り込まれた講義に、「大変勉強になった」「興味深かった」「これからに活かしていきたい」などといった感想が多く寄せられました。

講義全体を通して、参加者全員が改めて「不登校」の根本を見直し、さらに理解を深める機会となりました。

また、講義の合間にはグループディスカッションや質疑応答の時間が設けられ、他のSSWとの意見交換を通し、自らの取り組みを振り返る有意義な時間となりました。

